慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	リカードウ分配理論と「不変の価値尺度」(II) : 1819-20年の手紙を検討して
Sub Title	Ricardo on income distribution and 'Invariable measure of value' during the period 1819-20 (II)
Author	羽鳥, 卓也
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1979
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.72, No.5 (1979. 10) ,p.586(28)- 602(44)
JaLC DOI	10.14991/001.19791001-0028
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19791001-0028

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

リカードウ分配理論と「不変の価値尺度」(II)

——1819—20年の手紙を検討して——

羽　鳥　卓　也

1　スラッファの所説について
2　1819年後半期のマルサスとの論争
3　マルサス『経済学原理』におけるリカードウ批判の展開（以上前号）
4　1820年5・6月のリカードウの新見解（以下本号）
5　リカードウの「不変の価値尺度」論修正の含意と未解決問題

4．1820年5・6月のリカードウの新見解

（1）　5月2日づけマカァロクあて手紙について

本稿第2節で記したように，1819年夏から秋へかけての口頭および文通による討論によって，リカードウは「不変の価値尺度」論をめぐるマルサスの批判的見解の内容について，すでにかなりの程度知ることができ，マルサスの批判に触発されて『原理』第2版の自説の再検討を開始していた。そして，リカードウはこの年11月下旬から翌年夏までロンドンに滞在したから，マルサスの『原理』が刊行される20年4月初旬以前に，かれはおそらく何回かマルサスと会い，マルサスの所論の内容をさらに詳しく知る機会をもったことだろう。文献的に確認できるものだけでも，20年2月下旬リカードウが「マルサス氏と2，3時間過す」機会を多分ロンドンでもつことができたこと，(1) また3月下旬にはリカードウがヘイリベリのマルサス宅に2，3日滞在して，マルサスの『原理』のなかの地代論の章を読む機会を与えられたこと，(2) の2回をあげることができる。

リカードウはマルサスの『原理』が刊行された直後から第1回目の通読を開始して，4月末頃までにひととおり読み終えたらしい。(3) ところで，マルサスの『原理』が刊行される直前の4月2日

注（1）　この事実は，20年2月28日づけのリカードウのマカァロクあて手紙に記されている。cf. *Works*, VIII, pp. 159—60.
（2）　この事実は，20年3月29日づけのリカードウのマカァロクあて手紙に記されている。cf. *Works*, VIII, p. 173.
（3）　この点については，20年5月2日づけのリカードウのマカァロクあて手紙および20年5月4日づけのリカードウのマルサスあて手紙の文面を参照されたい。cf. *Works*, VIII, pp. 182—3.
なお，リカードウはこの年の7月中旬からマルサスの『原理』を再読しはじめ，この第2回目の通読の過程で『マルサス評注』と呼ばれる草稿を執筆するのである。この点については，20年7月27日づけのリカードウのジェイムズ・ミルあて手紙を参照されたい。cf. *Works*, VIII, p. 212.

に，マカァロクはリカードウあての手紙のなかで，「私はすでに大兄から多大な恩恵に与かっておりますが，マルサス氏の著作が出版された時，経済学に関する御高論に含まれている基本原理に対する氏の論駁についてどういう御高見をもっておられるかについての覚え書を御恵与下されば，(私はそれについてけっして他言はいたしません) 大変有難く存じます。」[4] と書き送っていた。マルサス『原理』の第1回目の通読を終えたリカードウは，このマカァロクの求めに応じて，5月2日づけの手紙のなかでかれの読後の感想を書き記した。

このマカァロクにあてたリカードウの感想文はかなり多岐な論点にわたっていて，興味深い論点がいくつかあるが，ここでは「不変の価値尺度」論および賃金・利潤相反関係論にかかわる部分に焦点をあわせて検討することにしよう。リカードウはつぎのように書いている。

「マルサス氏は，価値という主題のもつすこぶる複雑な性質のために，私見のなかに生じたある欠陥を発見する機会を，拙著のなかの他のどの部分でよりも価値を論じた章のなかでいっそう多く捉えているように思われます。そして，この機会は，媒介物それ自体〔の価値〕は不変でなければならないという私の想定のために，さらに多くなったように思われます。この媒介物の生産事情については，多様な想定をすることができます。……マルサス氏はこの媒介物がただ一日分の生活資料を必要とするだけで海岸で拾われるものと想定しています。……もしこの媒介物が労働だけで生産されるとすれば，——つまり，もし海岸で一日の労働で半オンスの銀を拾えるのだとすれば，労働の自然価格はつねに半オンスの銀であろうし，労働の価格が騰落することはありえないでしょう。しかし，穀物の生産が困難になるということはおこるでしょう。そうなれば，穀物価格の騰貴によって，労働者の賃金はかれが慰安品や便宜品を獲得するには不十分なものになるでしょう。この場合には賃金が上昇することになるだろう，と私は主張します。なぜなら，私はつねにあらゆる物の値上りをその生産に必要な労働の量によって測定しておりますし，また賃金は，たとえその分量が減少するにしても，その生産により多くの労働を必要とするようになるからです。」[5]

この一文の前段で，リカードウは『原理』第2版の「不変の価値尺度」論のなかに「欠陥」があったことを認めている。かれはその点に関しては，マルサスの批判が自説の弱点を摘出したことを率直に認めている。しかし，この文章の後段では，かれの「不変の価値尺度」論のなかにある「欠陥」が論理必然的に賃金・利潤相反関係に関するリカードウの命題を崩壊させることになると説くマルサスの見解に対して，かれは一歩も譲らず反批判を加えている。リカードウの反撃は，つぎのように展開されている。

——マルサスが想定したように，貨幣が一日だけの労働の使用によって生産される貴金属から成るとすれば，いかなる事情の下でも《労働》の価格は騰落しえないことになる。これはマルサスの主

注(4) *Works*, VIII, p. 176.
(5) *Works*, VIII, p. 179. ただし，傍点は引用者の施したもの。

張するとおりである。だが，マルサスはそれを根拠にして，利潤は賃金の騰落によって規制されるというリカードウの命題は崩壊したと主張している。しかし，この命題が依然として真理であることは，つぎのように考えれば直ちに明白になる。すなわち，劣等地耕作の進展を伴う蓄積過程では穀物生産の困難が増加するから，穀物価格が騰貴することになるが，そうなると，以前と同一額の貨幣賃金が持続した場合には，その実質購買力が減少することになり，労働者の生活水準は低下せざるをえないことになる。ところが，実質賃金の低下にはある限度がある。なぜなら，労働階級が少なくとも従来と同一の人口を供給しつづけることを可能ならしめるためには，かれらはそれ以下には削減することのできぬある一定量の生活資料を与えられなければならないからである。だが，労働人口の再生産にとって必要不可欠なこの一定量の生活資料の生産に投下される労働量は，劣等地耕作の進展とともに増加するにちがいない。ところで，《労働》という商品をも含めて，あらゆる種類の商品の価値は，その生産に投下される労働量によって測定されなければならない。そうだとすれば，この過程では《労働》の価値も騰貴するものと考えるべきであろう。したがって，この過程で利潤率が低下傾向を辿る理由は，依然として《労働》の価値の騰貴によって説明されなければならない。——

リカードウの所見は，おおよそのところ，上述のような筋道で示されているとみてよいだろう。してみれば，かれはこの手紙のなかで，「不変の価値尺度」論に関して，『原理』第2版の自説のなかに「欠陥」があったことを明白に認めていたけれども，価値決定の原理として労働価値論の立場に立脚したという点，および分配理論を労働価値論の基礎のうえに構築したという点については，旧来の自説を変更する必要を少しも感じていなかったということになるだろう。

それなら，当時のリカードウは「不変の価値尺度」論については，旧来の自説をどのような形に修正しようと考えていたのだろうか。このマカァロクあての手紙は，その点についても重要な示唆を与えてくれる。われわれは同じ手紙からつぎの一文を引用しよう。

「もし銀山で多大な固定資本が使用されているか，あるいは銀の販売によって流動資本が回収されるまでにかなり長時間の経過を要するかすれば，労働はこういう媒介物で測ればはなはだしく変動し易いでしょう。労働が値上りすると，労働のみの生産物であるような商品，あるいは貨幣の生産に用いられているよりも少ない固定資本部分を用いて生産される商品は，すべてこういう媒介物で測れば値上りするでしょう。またその反対に，貨幣の生産の場合よりも大きな割合の固定資本を用いて生産される商品，あるいは完成するまでに貨幣の場合よりも長い時間を要する商品は，同じ原因から価格が下落するでしょう。以上のことは，すべて拙著のなかで含意されていることです。しかし，私はその点を十分に明示してはおきませんでした。というのは，私は媒介物がある一定の事情の下で生産されておれば，労働の値上りの結果，値下りする商品も多数あるし，ほとんど価格が変動しない商品も多数あるけれども，そのほかに値上りする商品も多数あるというべきであった

のに，そうはいわなかったからです。……私はこの主題に対して，私のなしうる最善の考察を加えた後に，商品の相対価値に変動をひきおこす原因はつぎのふたつであると考えます。——第一は，商品の生産に必要な相対的労働量であり，第二は，こうした労働の所産が市場にもち出されるまでに経過しなければならぬ相対的時間です。固定資本についての問題はすべて，第二の原則に帰着するのです。(6)」

かれがこの文章のなかでみずから自説の一部を変更したことを語っていることは，誰の眼にも明らかであろう。かれはこの文章のなかで，賃金が騰貴すると，一部の商品の価格は下落し，一部の商品の価格は不変のままだが，そのほかに価格の騰貴する商品もあると述べたが，これはたしかにかれとしては新見解の提示といわなければならない。なぜなら，かれは『原理』第1・2版では，賃金が騰貴する時，一部の商品の価格は不変だが，そのほかの商品はすべて多かれ少なかれ価格が下落するのであって，この場合に価格が騰貴する商品はひとつもないと書いていたからである。(7)

それなら，こういう見解の変更はなににもとづいているのだろうか。それは貨幣の生産条件についての想定の変更である。かれは『原理』第1・2版では，全商品の生産に使用される流動資本の回収は等しく一年を要すると暗黙のうちに仮定したうえで，大多数の商品の生産には多かれ少なかれ固定資本が使用されているが，貨幣は全く固定資本を使用せずに一年間素手の労働を使用するだけで生産された貴金属から成っていると想定し，この想定のうえに立って，賃金の騰貴が物価に及ぼす影響について分析したのであった。これに反して，この20年5月の手紙では，貨幣は各種商品の生産諸条件全体のなかで，使用する固定資本の割合についても，流動資本の回収時間についても，中位の条件の下で生産される貴金属から成ると想定されているのである。賃金率の騰貴ないし利潤率の低下が商品価格に及ぼす影響についてのリカードウの捉え方がこの20年5月の手紙で変更されたのは，もっぱら貴金属の生産条件が上述のように全商品の生産諸条件のなかの中位のものであるという想定がこの時点で採用された結果なのである。

われわれはこれまで20年5月のリカードウのマカァロクあて手紙の内容を検討してきたが，これによってわれわれは，リカードウの脳裡にはこの時点ですでに，『原理』第3版での価値論の章の全面的補正という作業の輪廓がほぼ描きあげられていたとみてよいのではないだろうか。

(2) 6月13日づけマカァロクあて手紙について

注(6) *Works*, VIII, pp. 179—80. ただし，傍点は引用者の施したもの。

(7) 20年7月後半からリカードウはマルサスの『経済学原理』の第2回目の通読をはじめるが，その通読の過程で『マルサス評注』を執筆しはじめた。この『評注』のノート(25)のなかで，リカードウは賃金騰貴が物価に及ぼす影響についての自説に対するマルサスの批判につぎのように答えている。

「私は不注意にも，私の最初の命題の逆の場合を考察することを怠っていた。労働の価値が騰貴すれば，主として労働が入りこみ，速やかに市場にもち出すことのできる多くの商品は値上りするだろうというマルサス氏の主張は，正しい。」(*Works*, II, p. 64.)

上述のような内容をもつ5月2日づけのリカードウの手紙は，受信人のマカァロクにとってはおそらく理解に苦しむものだったにちがいない。というのは，マカァロクはリカードウの『原理』第1・2版の「不変の価値尺度」をめぐる議論を全面的に受け容れて，そこには意見の修正を加える余地は少しもないと確信していたからであった。[8] そこで，マカァロクは5月15日にリカードウにあてて返書を書いたが，そのなかで「私は御高論をかなりよく理解していると思ってはいるのですが」という前置きをつけて「諸商品が市場にもち出されるまでに経過しなければならぬ相対的時間がそれらの相対価値に影響を及ぼすにちがいないという点に関する御高見の簡単な要約文」をさらに追加して送ってもらえないものかという希望を書いた。[9] リカードウの6月13日づけのマカァロクあて手紙は，まさにこういうマカァロクの重ねての依頼に応じて書かれたものであり，リカードウとしてはすでに5月2日づけの手紙のなかで提示した「不変の価値尺度」をめぐる自身の新見解をいっそう詳細に再説することを目論んで書いた手紙なのであった。

本稿第一節で述べたように，スラッファはこの6月13日づけのリカードウの手紙が労働価値論に対するかれの「弱気の徴候」を示すとともに，分配理論を労働価値論から切断して構想しようとする気配を示すものだと指摘していたけれども，この手紙が書かれる経緯および5月のリカードウの手紙の内容から考えれば，スラッファの所説には批判的検討を加える余地が十分に残されているといわなければならないだろう。とにかく，われわれはこの6月のリカードウの手紙の内容を検討するために，まずはじめにつぎの一文を引用することにしよう。

「……商品の完成に要する時間が異なっている場合はきわめて多様ですから，たとえわれわれがその生産に必要な労働がつねに同一であるような商品は手にいれ難いという点を克服することができたとしても，一般的価値尺度として選ぶに相応しい商品をどれかひとつ選び出すということは困難なのです。両極端はつぎのようなものだと思います。一極は，商品が遅滞なく生産され，しかも資本を介在させずに労働だけで生産されるという場合です。他極は，商品が多量の固定資本の使用の所産であり，わずかしか労働を含まず，しかもその生産にはかなりの時間がかかるという場合です。こういう両極端の中位にあるものが，おそらく全商品に対して最も適合するものでしょう。労働の価格の騰貴および利潤率の下落につれて，この中位のものの一方の側に偏っている商品は，この中位のものと比べて価値が騰貴するでしょうが，その他方の側に偏っている商品は，同じ原因から下落するでしょう。[10]」

5月2日づけのマカァロクあて手紙では，貨幣の生産条件を全商品の生産諸条件のなかの中位の

注(8) 20年12月から翌年の1月へかけて，マカァロクは『マルサス評注』を読む機会を得たが，『評注』のなかに記されている「不変の価値尺度」論におけるリカードウの見解の変更に対して全面的に反撥した。かれはリカードウの旧説の妥当性を信じて疑わなかったから，リカードウのマルサスへの譲歩を理解することができなかった。この点は，21年1月22日づけのマカァロクのリカードウあて手紙に詳述されている。cf. *Works*, VIII, pp. 339—40.

(9) Cf. *Works*, VIII, pp. 188—9.

(10) *Works*, VIII, p. 193. ただし，傍点は引用者の施したもの。

ものとする想定が事実上採用されていた。だが，この6月の手紙の文面には「両極端の中位にあるもの」を「一般的価値尺度」として選択することが明示的に記されている。「中位」というのが，多大な固定資本が使用され，資本の回収に長時間かかるという一方の極と，少しも固定資本が使用されないで流動資本も速やかに回収されるという他方の極との「中位」を意味するのだと記されている。以上の点からいって，リカードウは遅くとも20年6月の時点ではかれの『原理』第3版の価値論の章の改訂の基本方針を確立していたといってよいだろう。(11)

ところで，この手紙のなかの，研究史上に難問を投げかけつづけてきた例の文章は，上掲の引用文に後続して記載されたものである。長文ではあるが，引用を省くわけにはいかない。

「この価値についての主題が困難にとり囲まれていることは，認めなければなりません。……私は時どきつぎのように考えています。すなわち，もし私が拙著のなかの価値についての章を書き改めることがあるとすれば，私は商品の相対価値がひとつの原因によってではなく，ふたつの原因によって規制されるということを承認するでしょう。ふたつの原因とは，つまり，問題の商品を生産するのに必要な相対的労働量と，資本が据置かれたままになっていて，商品が市場にもち出されるまでに要する時間に対する利潤の率とであります。私がこの主題についてこういう見解を採用すると，おそらく私は，これまで私が採用してきた見解のなかに見出されたものとほとんど同じくらい大きな難点を見出すことになるでしょう。それにもかかわらず (after all)，地代・賃金および利潤についての大問題は，地主・資本家および労働者の間で全生産物が分割される割合によって説明されなければならないのであり，それは本質的には価値の学説とは関係がないのです。最後に投下された資本によって生産された穀物および工場で労働によって生産された全商品については，われわれは地代を除去することができます。だが，地代が除去されれば，資本家と労働者との間の分配ははるかに単純な事柄になります。労働の所産のなかの労働者に与えられる部分が大きければ大きいほど，利潤の率は小さくなるにちがいありませんし，逆の場合は逆の結果が生まれるにちがいありません。ところで，この労働者の取分は，本質的には労働者の必需品の生産の容易さに依存するにちがいありません。——もし生産が大いに容易になれば，労働者に必需品を支給することは，資本および労働の所産である商品のなかの小さな割合で間に合うでしょう。その結果，利潤は高くなるでしょう。私はこの学説が真理であることを完全に証明できると考えています。(12)」

注(11) ただし，リカードウが実際に『原理』第3版の刊行に備えて，価値論の章の全面的改訂を意図した原稿を執筆しはじめるのは，1820年8月末ないし9月初めと推測することができる。この点については，20年9月4日づけのリカードウのマルサスあて手紙を参照されたい。cf. *Works*, VIII, pp. 229—30.

また，かれはこの新しい価値論の章を10月中旬までに脱稿したようであって，この点は20年10月14日づけのかれのミルあて手紙の文面から推測することができる。cf. *Works*, VIII, p. 284.

(12) *Works*, VIII, pp. 194—5. ただし，傍点は引用者の施したもの。

なお，本稿の主題と直接は関係がないことだが，この引用文についてはつぎのことを付記しておこう。リカードウは5月の手紙では，「商品の相対価値に変動をひきおこす原因」の第2のものは「労働の所産が市場にもち出されるまでに経

この文章のなかで問題になる箇所は，リカードウが分配問題の解明にあたって，これは階級間の生産物の「分割の割合」によって説明されなければならないと述べたうえで，「それは本質的には価値の学説とは関係がない」と指摘している章句であろう。たしかにこの章句だけを前後の文脈から切断して取出せば，ここではあたかもリカードウが労働価値論とは無関係に分配理論を構築することができると考えていたかのようにみえるかもしれない。しかし，この章句に後続する文章のなかで，かれは利潤の変動がもっぱら賃金の騰落に依存するのであり，しかも「労働者の取分は，本質的には労働者の必需品の生産の容易さに依存する」と明言し，この命題こそがかれの分配理論の核心を形づくっているのだという考えを示している。だが，これは労働価値論の適用によって分配問題の解明をはかろうとする接近方法を示すものではないだろうか。

利潤の変動は賃金の騰落によって規制され，賃金の騰落は「必需品の生産の容易さに依存する」という趣旨の，6月の手紙のこの一文は，さきほど引用した5月の手紙のなかの，「賃金は上昇する。……なぜなら，私はつねにあらゆる物の値上りを，その生産に必要な労働量によって測定しておりますし，また賃金は，たとえその分量が減少するにしても，その生産により多くの労働を必要とするようになるからです。」という文章と同一の趣旨のものとみなければならないだろう。この二通の手紙は，いずれもマカァロクにあてて書かれたものであり，6月の手紙は5月の手紙の補足説明として書かれているのだから，6月の手紙の文面に「生産に必要な労働量」という文言が見出されないからといって，スラッファのように，そこにリカードウによる労働価値論とかかわりのない分配理論の構想，つまり旧い「穀物比率論」の復興という構想があったと考えるのは，妥当な見解とはいえないだろう。

もっとも，このような私見に対しては，スラッファ説に同調する論者のなかには，この6月のリカードウの手紙では，分配問題は階級間の分配比率によって説明されなければならぬという点がもっぱら強調されているのであり，これは分配理論を労働価値論によって基礎づけようとしたこれまでのリカードウの態度とはちがっているのではないかという疑問を提出する者があるかもしれない。この疑問に十分に答えるためにはかなりの紙幅を必要とするから，詳細は別の機会に譲るほかないが，[13] いまさしあたりは，『マルサス評注』のなかの若干の文章に注意を喚起すれば，論者の疑問を

過しなければならぬ相対的時間」であると記していた。この表現では，あるいはリカードウは資本の回収時間のちがいそのものが商品価格の価値からの乖離を生む事情であるという認識をもちはじめていたのではないかという解釈が可能になるかもしれない。そのうえ6月の手紙のなかでは，商品の相対価値を「規制」する第2の原因は，「商品が市場にもち出されるまでに要する時間に対する利潤の率」である，と表現し直されている。解釈上問題は残るが，私は本稿では，当時のかれがあくまで価値イコール生産価格と即断したうえで，賃金率の騰落，その結果としての利潤率の変動によって商品価値そのものに若干の変動がおこるのではないかという問題を提起し，この問題にかれのすべての注意を集中していたものと考えておくことにしたい。

注（13） この点については，拙稿「リカードウの階級間分配率命題――『原理』第3版の改訂箇所をめぐって――」（岡山大『経済学会雑誌』11巻3号）を参照されたい。

ひとまず氷解させることができるだろう。

『マルサス評注』がリカードウによって執筆されはじめたのは，この20年6月のマカァロクあて手紙からわずかひと月余り後，つまり7月下旬からであったが，かれはこの草稿のなかでも，しばしば分配問題が分配比率によって説明されなければならないという点を力説していたから，分配比率による問題の解明という表現に注目する論者にとっては『評注』は看過できない重要な資料である。われわれはここでは，そのなかのノート (115) の一文を引用することにしよう。

「目下のところ，最後に耕作に動員された土地が一定量の労働を使用して180クォーターの穀物を産出しているが，翌年は穀物価格が騰貴したために，わずかに170クォーターしか産出しないような，さらに劣等な質[14]の土地が耕作されることになると仮定しよう。……労働者はこの170クォーターのなかから，以前180クォーターのなかから取得していた割合よりももっと大きな割合を取得することになるだろう。つまり，かれはこの等しい価値のなかのより大きな割合を獲得するだろう。したがって，私はかれの賃金は上昇したと主張する。最後に土地に投下された資本によって獲得される穀物の分量がどれほどであろうと，それは同一量の労働の生産物なのだから，同一の価値をもつだろう。この等しい価値のなかのより大きな割合はそれ自体より大きな価値でなければならない。私の価値の尺度は労働量である。[15]」

リカードウの考えはこうである。実質賃金一定と仮定すれば，賃金が産出170クォーターのなかで占める割合は，この劣等地が耕作される以前に賃金が180クォーターのなかで占めていた割合よりも大きいはずである。また，新たに耕作に動員された最劣等地で産出される170クォーターは，以前の180クォーターと「同一量の労働の生産物」であるから，前者は後者と「同一の価値」である。そこで，賃金が産出のなかで占める割合が劣等地耕作の進展とともに増大したのだとすれば，当然賃金の価値は増加したものと考えなければならない。あらゆる生産物の価値はその生産に投下される労働量によって測定されなければならないが，《労働》の価値の騰落は，賃金がその時どきの耕境の産出のなかで占める割合の増減という形で表現されるとみて差支えないというのである。

これによって明らかなように，分配問題は「生産物の分割の割合」によって解明されなければならないというリカードウの言明は，投下労働量による価値規定に立脚して分配理論を構築しようとするかれの試みと少しも抵触するものでも，そこから離反するものでもなく，むしろ労働価値論の分配問題への具体的な適用の仕方を指示するものにほかならなかったのである。

念のために，われわれは『マルサス評注』のノート (75) のなかのつぎの文章を追加して引用しておくことにしよう。この文章のなかにも「分割の割合」と価値，つまりは労働量との直接的な結びつきが明示されているからである。

注(14) ここで「質」と訳出したところは，原文では，quantity となっている。おそらく quality の誤記と思われる。
(15) *Works*, Ⅱ, pp. 196—7.

「労働者が『一定量の資本によって獲得される全生産物の価値のなかから取得する割合が増加した』ことが認められる時に，賃金が下落したというのは，大きな誤りだと考えなければならない。価値は割合によって測られるのだ，と私は思う。[16]」

要するに，賃金が騰貴したのかどうかという点は，究極的には賃金所得に相当する分量の生産物の生産に投下される労働量の増減によって判定すべき事柄だが，この労働量の増減は耕境の生産物中に占める賃金所得の割合の増減という形をとって表現されているから，われわれは賃金の騰落を生産物中に占める賃金の割合の増減によって判定することができるということであろう。

ところで，20年6月のリカードウのマカァロクあて手紙の文面については，まだ考察しなければならぬ問題点が残っている。それを考察するために，節を改めることにしよう。

5．リカードウの「不変の価値尺度」論修正の含意と未解決問題

（1） 貨幣に関する想定の変更の含意について

前節の考察によって明らかになったように，20年6月のリカードウのマカァロクあて手紙のなかには，分配比率による分配問題の解明は「本質的には価値の学説とは関係がない」ことだという趣旨の文言が記されていたけれども，かれはその前後の文脈を通して，相変らず分配理論が投下労働量による価値規定に立脚して構築されなければならないという従来どおりの考え方を提示しつづけていた。それなら，分配問題の解明は「価値の学説とは関係なく」遂行できるという趣旨の文言によって，かれはいったいなにをいおうとしたのだろうか。われわれは本節でこの点について考察してみたいと思う。

すでに知ったように，20年5月および6月のリカードウのマカァロクあて手紙では，貨幣の生産条件について，『原理』第2版における想定とは異なる新たな想定が採択されていた。すなわち，『原理』第2版では，貨幣が一年間にわたる労働のみの使用によって生産される貴金属から成ると想定され，この想定に立脚して，賃金の騰貴は貨幣の場合と同一の条件の下で生産される商品の価格を不変のままに据置くけれども，その他の全商品の価格を多かれ少なかれ下落せしめるのであって，これによって価格が騰貴せしめられる商品はひとつもない，と主張されていた。ところが，マルサスから厳しい批判を受けて，リカードウは自説を修正する必要に迫られたように思われる。かれは20年5月および6月のマカァロクあて手紙では，貨幣の生産条件を社会の全産業部門のさまざまな固定・流動資本の組合せの点で，またさまざまな流動資本の回収時間の点で，中位にあるものと想定し，この新たな想定に立脚して，賃金の騰貴によって一部商品の価格は下落せしめられ，一

注(16) *Works*, II, p. 138. ただし，傍点は引用者の施したもの。

部商品の価格は不変のままに据置かれるが，そのほかに価格の騰貴せしめられる商品も若干あるという新見解を提示することになった。

それなら，リカードウはどのような理由から，貨幣の生産条件についての想定をこのように変更し，したがってまた，賃金騰貴が商品価格に及ぼす影響についての所見を変更したのだろうか。この点を考察するためには，われわれはリカードウの「不変の価値尺度」論に対するマルサスの批判がリカードウの投下労働量による価値決定原理およびそれにもとづく賃金・利潤相反関係に関する命題に対する論難ということと密接に関連して遂行されていたことを想起する必要がある。すなわち，マルサスは本稿第2節で紹介した19年9月のリカードウあて手紙のなかでも，また本稿第3節で紹介したかれの『原理』の利潤論の章のなかでも，もし賃金の騰落によって少しも価格が変動しない商品は全く例外的にしか存在せず，大多数の商品の価格が騰落いずれかの変動を免れないというのであれば，商品価値はもっぱらその生産に投下される労働量によって規制されるというリカードウの根本命題が否認されなければならないことになるし，また利潤の変動は賃金の騰落によって規制されるというリカードウの命題も誤りだということになると主張していたのであった。

リカードウが『原理』第2版の自説を修正する必要を感じ，20年5月および6月になって，前述のように貨幣の生産条件を社会の全産業部門の生産諸条件のなかで中位を占めるものという新たな想定を採用することによって，賃金騰貴が商品価格に及ぼす影響について新見解を提示するようになったのは，前述のようなマルサスからの批判を考慮してのことであったように思われる。その点で，われわれにとって看過することのできない文献上の証拠は，『マルサス評注』のノート(187)のなかの，つぎの一文である。このノートは，リカードウの賃金・利潤相反関係論に対してマルサスが『原理』の利潤論の章のなかで加えた論難（本稿第3節第2項を参照されたい）を念頭におき，これに応酬しようという意図をもって書かれた文章である。

「マルサス氏は，いかなる媒介物を選んでも，それがいかなる事情の下でも正確な価値尺度であるということはないし，また正確な価値尺度といったものは想定することさえできないのだと明瞭に説いている。私はいまこれを認めるばかりでなく，これまでも私自身これを指摘してもきた。考えることのできる最も完全な価値尺度にもこのような除去することのできない不完全さがあるということのためにどんな修正が施されなければならないにせよ，私はそれに対して提出すべき異論をもたない。この価値尺度の不完全さは，〔労働の価格が変動した場合に〕若干の商品をある方向に，また若干の商品をその反対方向に価格変動せしめることになるだろうが，しかし，一般的平均がそのために大きな影響を受けることはないだろう。〔利潤は賃金の騰落によって規制されるという〕一般的原理がこの尺度の避けることのできない不完全さによって損われることは少しもない。」(17)

リカードウの記述はあまりに簡略であるため，多様な解釈の余地を残すかもしれないが，私はこ

注(17) *Works*, II, p. 288. ただし，傍点は引用者の施したもの。

れをつぎのような文意のものと考えたい。――リカードウの意見によれば，貨幣の生産条件をどのように想定しようと，あらゆる種類の商品の生産事情になにも変化が生じない場合でも，賃金の騰落によって諸商品の価格は若干の変動を免れない。しかし，それは投下労働量を価値決定の基本原理とみる立場を覆えすわけでもないし，利潤は賃金の騰落によって規制されるという命題を否認することになるわけでもない。なぜなら，もしわれわれが貨幣を社会の全産業部門のさまざまな生産条件のなかの中位にある平均的な生産条件の下で生産される貴金属から成るものと想定すれば，賃金の騰貴によって惹起される各種商品の価格変動の幅はきわめてわずかなものとなるし，そのうえそれによって価格が騰貴する商品と下落するものとは全体としてみれば相殺されるはずだからである。換言すれば，社会全体の平均的な生産条件の下で生産される商品の価格，したがってまた社会の全商品の価格総額は，賃金の騰貴によっては少しも変動しないはずだからである。(18) たしかにどのように貨幣の生産条件を想定してみても，賃金の騰落，したがって利潤率の変動の下では，商品価格の若干の変動は免れ難いのであって，その意味では，「考えることのできる最も完全な価値尺度にも除去することのできない不完全さがある。」それは，否定し難いところではあるが，それだからといって，われわれは労働価値論を放棄する必要はないし，分配理論を労働価値論によって基礎づけることを断念する必要もない。――

『評注』ノート（187）が上述したような意味内容のものだとすると，19年後半期から20年へかけてリカードウが「不変の価値尺度」論に関する自説を再検討したのは，マルサスの批判を受けてはじめてかれ自身が『原理』第1・2版の「不変の価値尺度」に関する自説には分配理論の基礎づけとして不適切な論点が含まれているということに気づいたからであったろう。実際『原理』第1・2版における貨幣の生産条件についての想定のうえに立って推論すると，社会のあらゆる種類の商品の生産事情になにも変化がない場合でも，賃金の騰貴は社会の全生産物の価格総額をいくらか減少させることになり，賃金の下落は総生産物の価格総額をいくらか増加させることになる。これでは，賃金の騰落は少しも商品価値を変動させずにただ利潤をその反対方向に変動せしめるものにすぎないというかれの根本命題そのものが傷つけられることになるだろう。おそらくリカードウはマルサスからの批判によってこの点に気づき，賃金の変動によっては総生産物の価格総額が少しも変

注(18) 以上の点の理解に関しては，『評注』のノート(27)の記述も参照されるべきである。

「マルサス氏は諸商品の交換価値が，実際はそれらに投下された労働に正確には比例していないということを証明している。私はいまこれを認めるばかりでなく，いままでもこれを否定したことはなかった。マルサス氏はそこから労働量が完全な価値の尺度ではないことを証明する。しかし，氏のあげる事情のために，それは完全な尺度からどの程度乖離しているだろうか。――もし乖離が私の主張するようにわずかであれば，その場合には，われわれは依然としてかなり正確な尺度をもっているということになるし，また，私見によれば，これまでに提案されたものよりも，正確な尺度にいっそう近似した尺度をもっているということになる。」（*Works*, II, p. 66. ただし，傍点の箇所は原文のイタリック。）

また，リカードウはノート（23）のなかでも，つぎのように述べている。

「私は諸商品の〔価値の〕相対的変動においては，生産に必要な労働量以外の原因は比較的わずかな影響しか及ぼさないという意見をもっていたが，いまもなお同じ意見をもっている。」（*Works*, II, p. 59.）

動することのないように貨幣の生産条件についての想定を変更しなければならないと考えるようになったのであろう。

かつてスラッファはこの論点について，つぎのように説いていた。

「このように賃金の変動が商品価格に及ぼす影響に〔リカードウが〕気をとられるようになったのは，価値の問題へのかれの接近の仕方が……かれの利潤理論によって支配されていたということに原因があった。かれの見解では，『経済学の主要問題』は国民生産物の階級間での分割ということであったが，その研究の道程で，かれはこの生産物の大きさがその分割の仕方の変化とともに変化するようにみえるという事実によって悩まされた。……こうしてリカードウの関心をひいた価値の問題は，この生産物の分割の変化に対して変動することのないような価値の尺度をどのようにして見出したらよいのかということであった。なぜなら，もし賃金の騰落それ自体が社会的生産物の大きさに変動をひきおこすのであれば，それが利潤に及ぼす影響を正確に確定することが困難になるだろうからである。(19)」

リカードウの「不変の価値尺度」論の修正に関するスラッファの指摘は，おそらく妥当なものである。私は『マルサス評注』ノート (187) におけるリカードウ自身のコメントを資料的裏づけとして，上述のようなスラッファの解釈を全面的に支持したい。

リカードウが利潤は賃金の騰落によって規制されるという命題を傷つけないようなかれの「不変の価値尺度」論の修正の仕方を見出した時期は，すでに指摘したところから明らかになったように，おそらく20年5月ないし6月であった。すでに引用したものだが，もう一度20年6月のかれのマカァロクあて手紙の一部分を引用しておこう。

「商品の完成に要する時間が異なっている場合はきわめて多様ですから，たとえわれわれがその生産に必要な労働がつねに同一であるような商品を手にいれ難いという点を克服できたとしても，一般的価値尺度として選ぶに相応しい商品をどれかひとつ選び出すことは困難です。……両極端の中位にあるものが，おそらく全商品に対して最も適合するものでしょう。(20)」

貨幣の生産条件が「両極端の中位にある」と想定されれば，少なくとも社会の総生産物の価格総額は，賃金率の変動や利潤率の変動によって変化せしめられることはけっしてないだろう。おそらくリカードウはこの時点でこのように考え，この考えに沿って『原理』第3版のために価値の章を書き改めようと思ったにちがいない。

(2) リカードウの未解決問題と「弱気」について

すでに明らかにされたように，リカードウの「不変の価値尺度」論に対するマルサスの批判の射

注(19) Sraffa, op. cit., *Works*, I, p. x|viii.
(20) *Works*, VIII, p. 193.

程は，労働価値論そのものの否認と賃金・利潤の相反関係の命題の否定とに及ぶものであった。だから，リカードウの『原理』第3版のための価値論の章の改訂作業は，なによりも労働価値論の基本原理と賃金・利潤相反関係論とを傷つけないように「不変の価値尺度」および賃金の騰落が物価に及ぼす影響についての所論を修正するという形ですすめられなければならなかった。だが，その点に関するリカードウの改訂作業はリカードウ自身にとってそれほど困難ではなかったように思われる。遅くとも20年5月ないし6月には，かれは貨幣の生産条件を「両極端の中位」と想定することによって，『原理』第2版の自説の欠陥を除去することができるという確信を得ていたように思われる。

しかし，マルサスの批判に触発されて行われた「不変の価値尺度」論再検討の作業は，リカードウ自身にただ貨幣の生産条件を「両極端の中位」と想定することによる改訂だけではすべてを解決しつくしたとはいえないような難点が残ることを自覚せしめたように思われる。だから，かれは『原理』第3版のための価値論の章の新稿の執筆をはじめるにあたって，「不変の価値尺度」論の叙述のなかで一部論点を保留して，その検討を他日の機会に委ねようと考えたらしい。この点で，20年9月4日づけのマルサスあての手紙のなかでかれがつぎのように記したのは，われわれにこういう問題のあることを考えさせる手がかりになるだろう。

「私は拙著の新版が出る前に，第一章のなかで少しばかり訂正を施すつもりで，この章を検討しています。私の仕事が大変難しいということは分っていますが，私見をもっと明瞭で分り易いものにしたいと思っています。私は学兄の攻撃の若干の点について私見を擁護するつもりでしたが，熟考した結果，私が十分に力を発揮するには，あまりに多くのことを言わなければならないので，きわめて不都合な仕方で拙著の大きさを拡大することになり，そのうえ読者の注意を拙著の主要論題から絶えず逸らすことになると思うようになりました。もし私が少しでも私見を擁護しようとするなら，なにか別の出版物で企てるべきでしょう。」(21)

これはリカードウが『原理』第3版のために価値論の章の改訂新稿を執筆している時期の手紙である。この引用文から明らかになるように，リカードウは「読者の注意を自著の主要論題〔＝蓄積過程における分配問題の解明〕から絶えず逸らすこと」をおそれて，第3版のなかでは「不変の価値尺度」に関する新たな自説のすべての論点を書くわけにはいかないと述べているのである。それなら，考察を将来の機会に委ねるべく保留された論点とは，なんであったろうか。われわれはこの点について若干の考察を加えたいと思う。

われわれはまず，20年5月2日づけのマカァロクあて手紙のなかでかれがつぎのように語っていたことを想起しよう。「私は……商品の相対価値に変動をひきおこす原因はふたつあると考えます。——第一は，商品の生産に必要な相対的労働量であり，第二は，こうした労働の所産が市場にもち

注(21) *Works*, VIII, pp. 229—30.

出されるまでに経過しなければならぬ相対的時間です。固定資本についての問題はすべて第二の原則に帰着するのです。[22]」

すでに述べたように，リカードウはこの手紙のなかで，賃金の騰落によってある商品の価格が騰貴するか，下落するか，あるいはまた不変のままであるかは，当該商品がいかなる固定・流動資本の組合せの下で生産されたか，また使用される固定資本がいかなる耐久期間のものであるか，さらには流動資本がいかなる期間で回収されるか，といった諸事情によってきまるのだという見解を提示していた。ところが，こういう見解を提示しながら，かれは上掲引用文では，「固定資本についての問題は，すべて第二の原則に帰着するのです。」と指摘していた。この場合，「第二の原則」というのは，「労働の所産が市場にもち出されるまでに経過しなければならぬ時間」に差異がある異種産業部門の間では，賃金の騰落ないし利潤率の変動によって商品の相対価値に若干の変動が生ずるという命題を指している。

「固定資本についての問題は」すべて「労働の所産が市場にもち出されるまでに経過しなければならぬ時間」の差異という問題に帰着するという考え方は，6月13日づけのかれのマカァロクあて手紙のなかでも繰返して記されていた。

「厳密にいうなら，商品に投下される相対的労働量がその相対価値を規制するのは，それらの商品にただ労働だけが，しかも等しい時間にわたって投下されている場合なのです。この時間が不等である場合には，それらに投下される相対的労働量がやはりその相対価値を規制する主要な要因なのですが，しかし，それは唯一の要因なのではありません。なぜなら，商品の価格は労働を償うほかに，商品が市場にもち出されまでに経過しなければならぬ時間の長さに対しても償わなければならないからです。一般的に規則に対する例外は，すべてこの時間という例外に帰着するのです。[23]」

リカードウは賃金の騰落，したがってまた利潤率の変動が商品価格に及ぼす影響を明らかにするには，異種産業部門間における固定・流動資本の組合せの差異をはじめとするさまざまな生産条件のちがいについて考慮する必要があると説いたうえで，これらのさまざまな生産条件のちがいは，結局のところ「商品が市場にもち出されるまでに経過しなければならぬ時間」の差異という一点に還元して捉えることができるというのである。

ところが，リカードウはこの問題のこのような整理の仕方を提言しながら，それと同時にすべてを資本の回収時間の差異の問題に帰着させることによって「不変の価値尺度」論を理論的に仕上げる途には「ある種の困難」が横わっていることを予感していた。かれはこの6月のマカァロクあての手紙のなかで，「商品を市場にもち出すことのできる相対的時間がそれらの商品の価格というよりもむしろ相対価値に及ぼす影響について説明するにあたって，私自身がある種の困難を感じるよ

注(22) *Works*, VIII, p. 180.
(23) *Works*, VIII, p. 193. ただし，傍点は引用者の施したもの。

うになると思います。[24]」と語っていた。

さらに，かれは同じ手紙のなかで，マカァロクにつぎのように訴えてさえいた。「この価値についての主題が困難にとり囲まれていることが認められなければなりません。――もし学兄がこの困難を解決することに成功して，これまで提出されてきたすべての価値尺度に反対してもち出された異論を出す余地のないような価値尺度をわれわれのために樹立して下さるなら，大変嬉しいのですが。[25]」

この文面はたしかに「不変の価値尺度」論の理論展開，とりわけ「不変の価値尺度」の選定問題の解決に対して当時のリカードウがはなはだ「弱気」であったことを示している。しかしながら，われわれがこれまで考察したところで知ったように，当時のかれは労働価値論の理論的妥当性に対する確信の点で「弱気」になっていたわけでもなければ，分配理論を投下労働量による価値規定の基礎のうえに構築すべきだという年来の考え方に対して「弱気」になっていたわけでもない。かれは投下労働量の増減のほかにも商品価値を変動せしめる原因のあることを認めたけれども，貨幣の生産条件を「両極端の中位」と想定することによって，投下労働量を価値決定の基本原理とみなす立場を堅持しつづけることができると確信していたのであった。

それなら，そのリカードウがこの手紙でどうして「弱気」としかみえないような言葉を記したのだろうか。すでに知ったように，かれは投下労働量による価値規定に対する「例外」をひきおこす事情としての，産業諸部門間における固定・流動資本の組合せの差異等々の生産諸条件の差異を「商品が市場にもち出されるまでの時間の長さ」の差異という一点に還元して捉えることができるという考えを示していた。ところが，かれはこの考えに沿って貨幣について「市場にもち出されるまでの時間」としてどのくらいの時間を要するものと想定したらよいかという点で，当時まだみずから納得できる解答を見出せなかったように思われる。かれが「弱気」になっていたのは，この論点の解決の見通しという点に関してであり，またその限りでのことであったように思われる。

以上に述べたような，われわれの推測の妥当性を裏づけてくれる貴重な資料は，21年1月25日づけのリカードウのマカァロクあて手紙のなかの，つぎの一文である。

「学兄に度々お話してきましたように，私は価値についてこれまで私が与えてきた説明に満足してはいないのです。なぜかというと，私の標準尺度をどこから選び出すべきかということが，私には正確には分らないからです。私は商品に実現された労働量をその相対価値を支配する基準として選ぶことが正しい方法だと十分に確信してはいるのですが，しかし，絶対価値の標準尺度を選び出そうとすると，私は，果して一年間の労働，それともひと月にわたる労働，一週間の労働，一日の労働のうちのいずれを選ぶべきかということで，決断しかねているのです。もし私がもっと考えれ

注(24) *Works*, VIII, pp. 191–2.
(25) *Works*, VIII, p. 194.

ば，いっそう満足できる結論に到達できるという期待の念をもっていたなら，……こんなに早ばやとこの困難な問題についての私の考えをお知らせするようなことはなかったでしょう。ところが，私がもっと満足できる結論に到達することはありえないにきまっているのです。なぜなら，私はこの問題についてこれまで熟考を重ねてきたのだから，私自身の独力の努力ではこの問題をこれ以上明らかにすることはできないことだ，といまでは絶望しているからです。[26]」

注意しなければならないことは，リカードウがこの手紙のなかで，『原理』第3版のために大幅に加筆補正が施された価値論の章の完成原稿が当時すでに印刷中であることを，マカァロクに報告していることである。[27] この事実とかかわらせて，この引用文を読むと，リカードウ自身が当時すでに第3版の価値論の章でさえも，「不変の価値尺度」論の理論展開としてけっして満足すべきものとは考えていなかったということが分るだろう。かれは産業諸部門間の生産条件に差異のある場合，賃金の騰落によって商品価格に若干の変動がおこるという問題を検討しているのであるが，かれは部門間で使用される固定資本の分量や耐久期間に差異があるという点を，すべて「商品が市場にもち出されるまでに経過しなければならぬ時間」の差異に還元して考えることができると考えていた。だが，そのように回収時間の差異に還元したうえで，かれは貨幣をいかなる時間で資本の回収が行われる部門の生産物と想定すべきかという点で，当時まだ最終的な解答を見出すことができなかったのである。

かれが20年6月のマカァロクあて手紙のなかで，価値論のなかには解決困難な問題が残っているという趣旨のことを記した時，かれが「困難」とみた問題はおそらくは上記のような資本の回収時間との関連で「不変の価値尺度」をどこから選び出したらよいかという問題であったろう。だが，この問題の解決に関してはリカードウはたしかに「弱気」であった。その点では，かれの「弱気」はけっして「一時の気紛れ」として処理することのできないほどの深刻さをもつ「弱気」であった。実際，われわれが知ったように，21年1月のマカァロクあての手紙のなかでは，かれはこの問題の最終的解決には「絶望」しさえしているのであった。

ここまで考察をすすめてくれば，われわれはようやく20年6月のリカードウのマクァロクあて手紙のなかの，あの謎にみちた一文の意味について一応の判断を下すことができるだろう。すなわち，問題の一文というのは，分配問題を分配比率によって説明することは「本質的には価値の学説とは関係がない」という趣旨のものである。この一文によって，リカードウが分配理論を労働価値論によって基礎づけることなしに構想しようとしていたことの証拠とみなす見解が誤りであることは，これまでの考察によって十分に明らかにされたといってよいだろう。事実，かれはこの21年1月のマカァロクあて手紙のなかでも，かれが「商品に実現された労働量をその相対価値を支配する基準

注(26) *Works*, VⅢ, 344. ただし，傍点は引用者の施したもの。
(27) Cf. *Works*, VⅢ, pp. 342—3.

として選ぶことが正しい方法だと十分に確信」していたことを明言していた。してみると，かれがこの一文で言おうとしたのは，こういうことであろう。価値論には「不変の価値尺度」の選定をめぐって解決困難な問題が残されてはいるが，分配理論を投下労働量による価値規定の基礎のうえに構築することにとってはこの解決困難な問題はかかわりがない。なぜなら，分配問題は分配比率によって解明することができるのだし，また「それは本質的には価値の学説〔の研究のなかに残されている解決困難な価値尺度の選定問題〕とは関係がない」からである，と。

問題の一文によってリカードウが本当にいおうとしていたのは，大体のところ，以上のような意味内容のことだった，と私は思う。しかし，それにしても1820—21年の時期にリカードウが価値に関する自説のなかにみずから見出した未解決問題とは，いったいどのような理論内容をもつ問題だったのだろうか。あるいは読者は本稿の最終節の説明によってもただ隔靴掻痒の感を抱くばかりであったかもしれない。実をいえば，この点についての本稿の説明が理論的掘り下げの浅いものだったということを私自身が認めなければならない。というのは，私見によれば，1820—21年の時期にリカードウはマルサスからの批判に触発されて，はじめて価値と自然価格との乖離という点を自覚するに至り，労働価値論そのものをもう一度根抵から鍛え直す必要があると考え，その作業に着手していたからである。したがって，リカードウ自身が当時未解決と考えた価値論上の問題については，われわれとしては価値と自然価格との乖離についてのリカードウの認識という点ともかかわらせて考察すべきであったのである。しかし，私は本稿のなかでこうした点にまで言及することは適切ではないと判断した。それは本稿の叙述を徒らに煩雑にして読者に本稿の主題を見失わせるおそれがあるからである。私はこの論点についての考察を，近日発表予定の拙稿「リカードウにおける価値と自然価格との乖離——1818—21年の資料を検討して——」のなかで企てるつもりである。この論点に関心をもつ読者にはこの拙論の参照をお願いする。なお，本稿第4節の脚注(12)で言及した問題点についても，その折に再検討するつもりである。（完）

（岡山大学法文学部教授）